

平成 30 年 5 月 16 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370015

研究課題名(和文) 西洋近代観念説の論理 自然主義的枠組みとその解体のダイナミクス

研究課題名(英文) The Logic of the Modern Western Theory of Ideas: Its Naturalistic Framework and Destructive Dynamics

研究代表者

富田 恭彦 (Tomida, Yasuhiko)

京都大学・人間・環境学研究科・名誉教授

研究者番号：30155569

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：西洋近代観念説は、原子論(粒子仮説)的な仮説的アプローチを基盤とする、外なる物そのものと内なる観念との区別に基づいて成立した「自然主義」的営みであった。その基本的枠組みは、デカルトとロックによって整えられたが、ロック以降、バークリやヒュームやカントは、それぞれの仕方での自然主義的観念説の枠組みを解体する。バークリは物そのものを廃棄することによって観念論を成立させ、ヒュームは、この物そのものを懐疑的に見ることによって自然主義的枠組みを歪めた。またカントは、表象が内的なものとして扱われるために不可欠な物そのものを認識不可能な物自体とするとともに、硬直した認識観・人間観を前面に出すことになった。

研究成果の概要(英文)：The modern Western theory of ideas was framed on the basis of the corpuscular-hypothetical distinction between outer “things themselves” on the one hand and inner “ideas” on the other; in this sense, it is a “naturalistic” one. After its basic framework was formed by Descartes and Locke, Berkeley, Hume, and Kant destructed it in their respective ways. Berkeley formed idealism (immaterialism), rejecting things themselves, and Hume distorted the framework by treating them from a skeptical point of view. Further, Kant treated the things themselves (Dinge an sich) as unknowable items and presented stiffened views of knowledge and human beings.

研究分野：哲学、西洋精神史、科学史

キーワード：西洋近代観念説 自然主義 観念 観念論 デカルト ロック バークリ カント

### 1. 研究開始当初の背景

基礎づけ主義と反基礎づけ主義、歴史主義と反歴史主義、自然主義と反自然主義等々の争いが、現代の哲学の主要な問題の一つとなつて久しい。この問題に対して、そもそもそうした争いの舞台の一つとなつた西洋近代観念説(表象説)がどのような論理を持っていたかが改めて問われなければならない事態となつていた。研究代表者は、最初の著書『ロック哲学の隠された論理』(1991年、英語版 Yasuhiko Tomida, *Idea and Thing: The Deep Structure of Locke's Theory of Knowledge*, in Anna-Teresa Tymieniecka [ed.], *Analecta Husserliana: The Yearbook of Phenomenological Research*, vol. 46 [Dordrecht: Kluwer, 1995], pp. 3-143)以来この問題に取り組み、そのデカルト、ロック、パークリ、カントの批判的読み直しの成果は、特に海外の専門誌ですでに繰り返し取り上げられてきた。本研究は、そうした現代哲学の問題圏を見据えつつ、研究代表者のこれまでの研究成果を踏まえて計画されたものである。

### 2. 研究の目的

本研究は、西洋近代認識論の基盤となつた観念説と、それが対象として扱うべき自然学との関係を再度取り上げて考察・検討することにより、近代認識論が自然主義的観念説の枠内で本来機能していたことを再確認するとともに、それがどのような仕方で変質・解体していったかを、デカルト、ロック、パークリ、ヒューム、カントを取り上げて解明しようとするものである。

### 3. 研究の方法

本研究では、まず、ロックの観念説の自然主義的論理を再確認する。次に、遡ってデカルトの観念説を取り上げ、そこにもまた自然主義的枠組みと自然主義的論理が認められることを明らかにする。デカルトの自然主義的枠組みは彼の典型的な基礎づけ主義と表裏をなしており、この点についての考察を欠かすことはできない。その上で、パークリとヒュームとカントを取り上げ、彼らの観念説ないし表象説が、自然主義的特徴を典型的に示すロックの観念説をどのような意味で基盤としていたか、そして、彼らの説が、どのような仕方で密かに自然主義的論理を引き継ぎながら、その解体を進めるものであったかを順次検討する。

### 4. 研究成果

本研究の成果は、次のとおりである。

(1)平成25年度は、ロックにおける「知覚表象説」的契機(三項関係的認識論の枠組み)と「直接実在論」的契機(日常的・二項関係的観点)との関係を再検討し、観念本来の自然主義的論理空間の重層構造を再確認することから研究を開始した。

日常的に「物」と見なされているもの(これを「経験的对象」と呼ぶ)の向こう側に新たな粒子仮説的な「物そのもの」を指定することによって、経験的对象は、心の内なる「観念」として、他のすでに「内的」とされてきたものとともに「心の中」に位置づけ直され、それによって物そのもの/観念/心からなる三項関係的枠組みが構成される。この基本的な見方をより明確にするため、ここでは、日常的にすでに「内的」とされているもの、例えば痛みの感覚や狭義の心像と、経験的对象が身分を代えて観念とみなされるようになったものとの関係を、明確にするよう努めた。

平成25年度後期は、研究代表者の見解を理解する上で研究者にとってしばしば躓きの石となっているものすなわち、日常的な「物」を構成する要素的観念のうちからあるものを選んでそれらから新たな粒子仮説的「物そのもの」の「観念」を作るといふ言い回しが、物そのものと観念とを峻別するロックの基本的立場とどう整合するかという問題について、その答えを明晰に示す方途を探った。ロックが「観念」を広狭二義に用い、「物そのもの」ですら「観念」とする場合があることをどのように捉えるかという、これまで十分に検討されてこなかった問題が、ここではとりわけ重要となる。パークリの観念論とは異なる意味ですでにある種の観念論的な性格を示していたこのロックの立場を十全に理解するには、いわゆる「志向性」という、その論理を十全に把握することの極めて困難な現象に立ち向かう必要がある。25年度後期の研究はこの志向性の問題に特に重点を置き、その視点からロックをどう読むかにつき一定の成果を得た。

(2)平成26年度は、一般の研究者にとってしばしば躓きの石となつてきた上記の問題について、その答えを明確に示す方途を探ることが、前年度に続き試みられた。そして、「志向性」の問題を前年度に引き続いて扱うとともに、ロックに先行して17世紀観念説の原型を与えたデカルトの見解を取り上げ、17世紀の自然主義的観念説の原型が持つ論理を可能な限り明晰に再提示するよう努めた。

研究を進めるにあたって注意しなければならなかったことの一つに、デカルトの自然学的著作と第一哲学に関する著作との関わりがある。デカルトは公式的には第一哲学(形而上学)をもって自然学の支えとし、第一哲学に自然主義的論理を持ち込まない反自然主義的・基礎づけ主義的立場を採っている。そうした彼の第一哲学と、そうした性格づけにもかかわらずそれが実質的に持っていた「自然主義」的基盤との関係に留意しながら、デカルトの「観念」の論理空間を検討し、それとの関係において上述のロックの問題により十全な回答を与えるよう努めた。

(3) 平成27年度は、バークリの観念説の再検討を進めた。バークリは、ロック的三項関係のうちの観念と心との関係を例えば *esse is percipi* という表現のもとに保持し、その一方で「似たもの原理」等々を用いてロック的「物そのもの」を否定しようとする。しかも、「直接的知覚」の対象となるものとしての「物」、つまりロック的な「経験的对象」に関しては、そのあり方とさらなる諸観念の生起との関係を「自然法則」として捉えようとする。もとより、バークリにとって、ロック同様、「経験的对象」は観念の集合体にほかならず、したがってバークリがここで言うところの「自然法則」は、観念間に認められる記号的法則性にほかならない。ヒュームを想起させるこうした自然法則の捉え方を解明し、それをロックの場合と比較することによって、バークリの観念説の論理のなお一層の明確化を図ることが平成27年度の研究の主眼となった。

また、平成27年度には、バークリが物質に代えて持ち出す「神」が、どのような論理のうちにあるかを、併せて明らかにしよう試みた。ロックの観念説でも、神は重要な役割を果たすが、バークリは、物質ないし物そのものを拒否することと引き替えに、神に対してより重大な役割を担わせる。バークリにおけるこの神の役割に検討を加え、物質否定によって空白になった論理空間が、その神への役割付与によって十全に満たされたと言えるかどうかについても、併せて検討した。

上記に加えて、「物」(経験的对象)の「外在性」の認知に関するバークリの見解の再検討も進めた。『新たな視覚理論のための試論』における彼の議論は、知覚に関するロックの見解をさらに発展させたものとして捉えられるが、その議論においてバークリが行う外在的認知の説明が、外界を心の中にある観念からなるものとする彼の見解とどのようにかみ合っているかを明らかにした。

(4) 平成28年度は、前年度までの研究成果を念頭に置きつつ、まず、カントの観念説(表象説)の読み直しを行った。その基本的方向性はすでに Yasuhiko Tomida, “Locke’s ‘Things Themselves’ and Kant’s ‘Things in Themselves’: The Naturalistic Basis of Transcendental Idealism,” in Sarah Hutton and Paul Schuurman (eds.), *Studies on Locke: Sources, Contemporaries, and Legacy* (Dordrecht: Springer, 2008), pp. 261–275 に示したところであるが、平成28年度の研究ではさらに独断的観念論や懐疑論的観念論に対するカントの批判の真意を考察するとともに、「心の中」の意味を再度明らかにしよう試みた。その結果、ロックの遺産の継承とその論理の変質過程の実際が、より明確になった。

平成28年度は、上記の予定されていた作業に加えて、カント研究をさらに進めた。『純

粋理性批判』に見られるカント哲学を、科学史も含めた西洋精神史の文脈の中に置いて見たとき、いくつかの歪んだ論理が明らかになる。その実際を、伝統的論理学の歴史の確認も含めて、明確にするよう試みた。それと同時に、『純粋理性批判』が全体として「超越論的観念論」の論理をどのような形で示しているかを、再度明確にするよう試みた。その結果、例えば、カントの「構成」の考え方に見られる一般観念説の論理が、ロック、バークリ、ヒュームのそれとの比較においてどのような特徴を持つかが明らかとなり、それと密接に関わる彼の「図式」論の意味の明確化を図ることができた。

こうした作業とともに、ロックの反生得説がしばしば「タブラ・ラサ」という言葉とともに言われていることの是非を、プラトン・アリストテレスにまで遡って検討し、『人間知性論』で実際に使用された「白紙」という言葉の歴史的背景を探る作業も、あわせて進めた。

(5) 平成29年度は、これまでの研究成果がどのような人間観の変更を求めることになるかを検討した。その結果、次のことが明らかとなった。

西洋近代観念説は、復活した原子論(粒子仮説)もしくはそれに類する自然科学上の仮説的アプローチを基盤として、外なる物そのものと内なる観念との区別に基づいて成立した。それは、その限りにおいて、自然科学を基にメタ自然科学(形而上学)的考察を進めるといふ、「自然主義」的営みであった。

こうした特徴を持つ西洋近代観念説は、その創始者であるデカルトにおいては、学問を第一原理から構成されるべきものとする基礎づけ主義的な見方と接続していたが、ロックにおいては、そうした性格を持たないより整合的な自然主義的観念説としてその形態を整えることになった。

ロック以降、バークリやヒュームやカントは、それぞれの仕方での自然主義的観念説の枠組を解体する。バークリは物そのものを廃棄することによって観念論(物質否定論)を成立させるが、それは観念を内的なものとして位置づけるのに不可欠な物そのものを否定するという、矛盾した振る舞いであった。ヒュームは、この物そのものを懐疑的に見ることにより、バークリとは異なる仕方での自然主義的枠組を歪めた。またカントは、表象が内的なものとして扱われるために不可欠な物そのものを認識不可能な物自体とするとともに、われわれの認識の基本的枠組の歴史の変更を容認しない、硬直した認識観・人間観を提示することになった。

こうしてバークリからカントに至る営み

が觀念説の自然主義的枠組みを歪めるものであったことが確認されると、デカルトやカントに見られる硬直した学問観がわれわれの知的営みの実際とはかけ離れたものであることが明確になり、信念のネットワークを必要に応じて編み直しながら生きていくものとして人間を捉えようとする新たな人間観が前面に出ることになった。

以上の研究成果は、5篇の論文と6篇の図書の形で公にされた。先述のように、研究代表者の西洋觀念説理解は、海外でもこれまで1990年代から専門誌で取り上げられてきたが、今後さらに研究成果を、国内はもとより、海外に向けて発信することが望まれている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計5件)

Yasuhiko Tomida, *Experiential Objects and Things Themselves: Locke's Naturalistic, Holistic Logic, Reconsidered*, *Locke Studies*, 14 (2014), pp. 85-102. 査読有

富田恭彦、古典的経験論と自然主義、人間存在論、招待講演の記録、第21号、2015、pp. 75-85

富田恭彦、カントの超越論的觀念論の歪んだ論理空間 『純粹理性批判』の自然主義的基盤・再考、思想、査読なし、第1100号、2015、pp. 68-93

富田恭彦、カントの「一般觀念」説と図式論、思想、査読なし、第1108号、2016、pp. 117-139

富田恭彦、ロックと言えはタブラ・ラサ考、人間存在論、査読なし、第22号、2016、pp. 43-47

##### [学会発表](計1件)

富田恭彦、チャリティーの果てに お応えと敷衍、関西哲学会、招待講演、2017

##### [図書](計6件)

Yasuhiko Tomida, *Locke, Berkeley, Kant: From a Naturalistic Point of View*, 2nd edn., revised and enlarged, 2015.

富田恭彦、觀念論の教室、ちくま新書、2015、238

富田恭彦、ローティ 連帯と自己超克の思想、筑摩選書、2016、306

富田恭彦、カント哲学の奇妙な歪み 『純粹理性批判』を読む、岩波現代全書、2017、218

富田恭彦、カント入門講義 超越論的觀念論のロジック、ちくま学芸文庫、2017、317

富田恭彦、ロック入門講義 イギリス経験論の原点、ちくま学芸文庫、2017、340

[その他]

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/diogeneshil/home>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

富田 恭彦 (TOMIDA, Yasuhiko)

京都大学・大学院人間・環境学研究科・名誉教授

研究者番号：30155569